

詩 3 ツ 露古

からかい

夢の中でそのひとは
この花はあけがたに歩くよ
、とか言っている
わたしはまったいらになって聞いている
花はからから
からら

一見するとそれらは僕の領域内の僅かな性分で行ったり来たりを繰り返してそれでもいつかは終わるんだねとかスマートに置き換えてくれる親切な人もいたりなんかして要するに僕という認識は機能の一種であるらしくああたまんねえなあとかやってるうちにまたなんかわけもなく始まったりするここはどこかな

やあ
って現れてんけど
やあ
なんてふつう言わへんやろな

祈りの夕べ

蝶と蜥蜴が並んでいる
どこまでも真っ直ぐに

そして祈りのように夜は更けて